

沖縄ん 建築紀伝

横断する眼差し

■ 3回 ■ 国場幸房(建築家)
メタボリズムの潮流の中で

へ一九五八年に早稲田大学に入学する。その当時の日本は高度成長の時代に入り、耐久消費財のテレビ、洗濯機、冷蔵庫の「三種の神器」が大流行。建築界では、先日、逝去された世界的な建築家丹下健三氏による東京都庁舎や菊竹清訓氏のスカイハウスやフランク・ロイド・ライトのグッゲンハイム美術館が完成する。▽

絵が得意ということで建築学科の計画の方へ進むことになったが、まだ建築に傾倒する知識も無く一般的な悩み多い青春の最ただ中であつた。日ごろ悩み気にしていたこともあって、一般教養科目に哲学、論理学、心理学のそれぞれの概論を選択して受講した。哲学概論では(考えている事、此れ即ち哲学である)と聞いて癒される思いをした。論理学概論では(AはAである)の公理を、歴史の中で長年繰り返して議論された世界を知った。神秘的に思っていた心理学概論では心理学が統計の数字の上に成り立っているように思えてホッとした。その他、芸術

に対する疑問は、岡本太郎の(今日の芸術)を読んで勇気付けられた。最大の課題である、人生については小林一茶の(タライからタライへのちんぷんかん)の言葉のように、結局は分かんないということで一先ず自分を落ち着かせた。

建築学科で教わったこと

其の頃建築の世界では、シドニーのオペラハウスのコンペが話題になっていた。リアルタイムで穂積信夫先生がアメリカから帰ってこられ、オペラハウスが設計者ウッチオンに決まった経緯など、イエロー・サーリネンの「F&A」空港を設計したときの話などは情熱的な話で学生に夢とロマンをもたせられてくれた。又、今井兼次先生はガウディーやシュタイナーの建物を感動的に静かに力強く話された。憧れの吉阪隆正先生はキリマンジェロや世界中の登山に出かけ、結局一回の講義と教回のゼミしか聴講出来なかつたが、それでも強く印象に残っている。コルビュジエの弟子である吉阪先生のコルのモデュロールの話などフランス語を混ぜながら話ってくれた。氏は殆ど我々に講義をしてやれなかつたことを謝罪しながらも、世界中で早稲田大学のプロパガンダをしているので、どの国へ君たちが行っても大丈夫だという話は愉快だった。

へ一九六〇年、日本は六〇年安保闘争で激動の時期を迎える。三十三万人のデモ隊が国会議事堂を取り巻き、学生運動最盛期であつた。建築界でも一九六〇年の世界デザイン会議に向けて結成された「メタボリズム」グループの活動が隆盛になり、新たな建築の方向性を模索した時

代でもあつた。新進気鋭の大高正人、川添登、菊竹清訓、槇文彦、黒川紀章氏らが中心になつた。戦後の建築潮流の一端を構築した。その運動の理念は、建築とか都市は固定化され閉じた機械であつてはならないし、常に新陳代謝をしながら成長していく有機体でなければならぬという理念に基づくものであつた。増殖、交換、分裂、破壊という4つの要素があつた。時代の潮流にもり、日本初の国際的な建築運動としてアジアをはじめ広がっていったと思う。▽



大高事務所時代の仕事風景

建築の設計実習の教科に日本の近代建築の巨匠前川國男(故人)の愛弟子大高正人先生が講師として我々を教えに来てくれた。ある時学習の一環として氏が前川事務所と携わっていた竣工間際の上野にある東京文化会館の現場見学をさせてもらった。その時の建築空間の素晴らしさに感動し、建築設計の思考の重大さや偉大さを考えさせられた。その後、大高先生が独立して事務所を開設したので、卒業後、日本の最先端の設計世界を学びたく入所をお願いし許

可された。その当時、大高事務所には「メタボリズム」グループの人たちの出入りが頻繁であつた。



葉山での所員たちとの憩いのひと時

事務所のある代々木の周辺には大谷幸夫や鬼頭梓、黒川紀章氏などの著名人の事務所が多く、嫌が上にも刺激のある環境であつた。所員の間では常に建築論が戦わされていて、一二年は週一度しか帰宅出来ない状況が続いた。



大高事務所時代
週に一度しか帰れない日々が続いた